

アジア各国ハンセン病 についての講演会

「知ってほしい。日本、アジアのハンセン病のこと。」

学生時代、中国のハンセン病回復村でワークキャンプ活動を行い、卒業後インド・インドネシアでNPO・ボラティア団体を立ち上げ、現地で活動を広めてきた2人の若者。

今では薬で治る病気とされるハンセン病ですが、以前は不治の病として恐れられ、敬遠され、長年にわたり差別されてきた事実があります。そして国によって差があれど、この病気に対する誤解や差別が未だ残っているのです。

ハンセン病とはどんな病気なのか、日本・インド・インドネシアではどのような問題があるのか、そしてそのような中で日本人の若者が何がきっかけで、何を考え、どのような活動を展開しているのか、ご来場者の皆様にお話しします。



檜山 大輔

1989年生まれ、東京都出身。

早稲田大学在学中にインドのハンセン病コロニーを訪問。大学卒業後一般企業で勤めていたが、2016年に退職し、インドハンセン病コロニーを支援するNPO法人わびねすの専任理事となる。

主に就労支援事業を担当し、マイクロファイナンス事業やきのこ栽培事業をハンセン病コロニーで立ち上げ、コロニーの人々の収入向上に尽力している。

高島 雄太

1988年生まれ、香川県出身。

大阪外国語大学に入学し、インドネシア語を専攻。学生時代、ハンセン病と中国での活動に影響を受け、1年間の休学を決断。インドネシアのハンセン病コロニーに滞在し、大学生を中心に現地の人を巻き込み、ワークキャンプ団体を設立。現在は公認財団Yayasan Satu Jalan Bersamaの設立を目指し、西ジャワ州にて日々奮闘中。

2020年1月19日 (日) 13:00開場 13:30～16:00

(入場無料・先着順定員あり)

場所：国立ハンセン病資料館（映像ホール）

お申し込みは[こちら](#)から

主催：JALAN 協賛：日本財団